
バカと弓矢と召喚獣

ゴウセツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと弓矢と召喚獣

【Nコード】

N7671M

【作者名】

ゴウセツ

【あらすじ】

高校二年の春――主人公盾宮優斗はハチャメチャでメチャクチャな学園生活を迎えるのであった！！

「・・・おや？何だか不安しか感じないのですが・・・」

「・・・あれ？僕の平穩は？」（前書き）

今作が作者の処女作となります、まだ機能をよく理解していない為、
改正等が多くありますが暖かい目で見てやってください（！？）

「・・・あれ？僕の平穩は？」

高校二年の春――僕は今、学校へと続く道を走っている。

道の両側には目を奪われてしまうような桜が咲き誇っている、しかしそれには目もくれず、全速力で走っている・・・もう頭の良い皆様にはお分かりだろう、そう、僕、盾宮 優斗はただいま

「二年の、しかも転校初日から遅刻は不味いですね！！」

遅刻している

僕は今日から文月学園に転校する、この文月学園には「試験召喚システム」という物がある。これは科学とオカルトと偶然により完成した物で、テストの点数に応じた強さの『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムである。さらにクラスごとに戦う試験召喚戦争という物もあるらしい。かくいうこの僕もその召喚獣に興味津津なのです。

・・・なぜこんな説明口調なのでしょう？

まあ良いです、とにかく学校に

「おい転入生、遅刻だぞ」

・・・入る前に呼び止められた、・・・先生でしょうか？

「あ、どうも、おはようございます」

と頭を下げて挨拶をする、挨拶はちゃんとしませんとね。

「ふむ・・・礼儀正しいな・・・あいつらに学ばせたいもんだな」

ん？最後のほうが聞こえませんでしたか・・・まあ良いでしょう。

「じゃあ、失礼します」

「おい、待てクラスも解らずに行く気か？」

「はい？」

「ほれ、この封筒の中にクラス分けの紙が入っている、受けとれ」

「あ、ありがとうございます」

こんなところでクラス分けを発表するなんて珍しいですね。

「・・・転入生、いきなりこんなことを言うのもなんだがな」

ん？なんだろう、しかし開けにくいですねこれ、上を破りますか。

「確かに一部のテストはできていた、だがな一部のテストは壊滅的だった」

さてとクラスは・・・

「・・・これを言うのは心苦しいが・・・」

クラスは・・・

『盾宮優斗・・・Fクラス』

「お前はバカだ」

・・・はい？

「なんでしょうこの廃屋は？」

謎の肌黒教師のバカ発言を乗り越え・・・初対面の人にバカにされると結構傷つきますね・・・現在、Fクラスに向かっています。

クラスはAとFに分かれていてAが一番頭がよく、Fが一番頭が悪いとされている。

でも関係ありません、ゆつくりできる場所なら周りの評価なんて

（Fクラス前）

前言撤回、なんですかこの廃屋は！？

窓は割れ、クラスが書かれたプレートは割れ、机はちゃぶ台・・・ま、まあ住めば都と言いますし、見た目で毛嫌いするのもね、うん。

・・・よし、まずは中に入って見よう、話はそれからです・・・。

「すいません、遅れてしまいました。」

「早く座れ、このウジ虫野郎」
グサア！！

・・・え？何？いきなり暴言が聞こえたのですが？挨拶をしてすぐに暴言って・・・このクラスでやって行く自信が一瞬で粉碎されたんですが・・・

「ん？ああ、すまん人違いだ」

・・・人違い？

「そ、そうですか人違いですか、次からは間違いないようにしてください」

「ああ、そうしよう」

なんだ人違いか、自信取り戻しました・・・で、ん？

「あの・・・あなた生徒ですよ？どうして教壇に？」

「ん？ああ、先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「なるほど」

ってことはこの赤い髪の人リーダー的存在ってことですよ。

「えーと席は・・・」

「自由だ、どうか適当に座ってくれ」

「あ、ありがとうございます」

なるほど自由・・・じゃあ奥の方に座ってと。

ふむ、時間があるみたいですし、本でも読んでいましょうか。

『すいません、ちょっと遅れちゃいました』

『早く座れ、このクソゴミ虫野郎』

・・・今入って来たのが本来のターゲットですね、しかもパワーアップしていますし。

・・・なるほど、赤い髪の方は雄二と言うのですか、そして最高成績優秀者・・・あながち予測は外れていなかったわけですね。

そしてクソゴミ虫野郎呼ばわりされた方は・・・バカそうだなうん。

『えーと、ちょっと通してもらえますかね？』

あ、先生らしき人が来ましたね、本をしまつてと。

「えー、おはようございます、二年F組担任の・・・福原慎です。よろしく願います」

福原先生は名前を書こうとして、やめた。・・・チョークすら無いのか・・・

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

・・・ここは本当に教室なのですか？不安になります

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

恒例の自己紹介ですか、他の人のを聞いておかないと誰が誰だかわからなくなりますからね、きちんと聞いておかないと。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

一見女子に見えるが、制服は男子用だし、名前も秀吉。どうみても男ですね。

「と、言うわけじゃ。今年一年間よろしく頼むぞい」

微笑みながら締めくくる秀吉君・・・何人か頬を赤らめたが、秀吉君は男ですよー。

「・・・土屋康太」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？終わり？短すぎると思いますか・・・

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

次は女子ですか、見たところ女子は彼女しかいないようですが、大丈夫か

「趣味は吉井明久を殴ることです」

大丈夫ですね。そしてまだ見ぬ吉井明久君かわいそうに

おや、次はクソゴミ虫野郎君ですか、本名は一体

「コホン。吉井明久です。」

・・・サンドバッグ君でしたか。

「気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

ダーリンって、そんなこと言うようなバカはさすがに

『ダアアーリーーン!!』

バカばかりです

言われた明久君も吐き気をこらえていますね、無理もない。ん、僕の番ですね。

「皆さんはじめまして、転校生の盾宮優斗です。今日から一年間よ

ろしく願います。」

- ・・・・こんなところですかね。なるべく印象よくしてみました・・・
- ・・・・これから先、どうなるでしょう？

「馬鹿ばかりですね、このクラスは」（前書き）

バカテスト 【第一問】

科学

問 以下の問いに答えなさい

『料理のために鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると酸素と激しく反応する為危険であるという点
合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（　すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

盾宮優斗の答え

『合金の例・・・オリハルコン』

教師のコメント

せめて実在するものにしてください。

「馬鹿ばかりですね、このクラスは」

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ?』

ピンク色の髪をした女の子が入ってきましたが・・・女子がこのクラスに来るのがそんなにかしいのでしょうか?

「丁度良かったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

なるほど、姫路さんか。

「はいつ!質問です!」

「あ、は、はいつ。なんですか?」

「なんでここにいますか?」

・・・質問の意味がわかりません、というか、どう聞いてもイジメのようにしか聞こえませんが・・・

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・」

『ああ、なるほど』

・・・なるほど、姫路さんはFクラスに来るのがおかしいレベルの秀才なのに熱のせいでテストを受けられず、Fクラスになってしまったと。それならば先ほどの質問も意味がわかりますね。他の皆さんも何か理由が

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

純粹なバカばかりですね。・・・おや、姫路さんが近くに座りますね、挨拶くらいはしておきましょうか。

「き、緊張しましたあゝ・・・」

「あのさ、姫」

「「姫路（さん）」」

おや、吉井君を遮ってしまった上に雄二君とかぶってしまいましたね。

「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。」

「転校してきた、盾宮優斗です。よろしくお願いしますね。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします。」

・・・遮られた吉井君が負のオーラを漂わせているのですが・・・何か計画を狂わされてもしたのでしょうか？

「そう言えば・・・先ほど高熱を出したと言っていました、体のほうは大丈夫なのですか？」

「あ、それは僕も気になる」

「よ、吉井君!？」

ん？名前を知っている・・・彼らは知り合いなのでしょうが？

「姫路。明久がブサイクですまん」

「坂本君、ブサイクは言い過ぎですよ。確かに面白い顔ですが・・・」

「二人とも!!!フォローになってないよ!？」

「そ、そうですよ!それに吉井君は、目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクや面白い顔なんかじゃないですよ!その、むしろ・・・」

・・・今の反応からして・・・姫路さんは吉井君の事が好きなのでしょうか?・・・フツ、面白そうですね。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気

もするし」

「おや、そんな物好きが居るのでしょうか？」

「盾宮君、初対面なのにさつきから酷くない!？」

「そ、それって誰ですかっ!？」

「確か久保　　利光だったかな」

利光　限り無く男性につけられる名前　おそらく　（性別／オス）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「吉井君、現実を受け止めなさい」

「そうだぞ明久。声を殺してさめざめと泣くな」

「・・・坂本君、結構気が合いますね」

「ああ、そうだな、仲良くやっていけそうだな」

「「主に明久（吉井君）いじりで」」

「二人とも酷すぎるよ!！」

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

「「あ、すいませー」」

バキィッ バラバラバラ・・・

・・・軽く叩いただけで崩れ落ちる教卓って・・・この環境はどれ程劣悪なのでしょう？

「えゝ・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

「「あ、あはは・・・」」

もう乾いた笑いをするしかありませんね・・・

・・・おや？あの二人が廊下に出ていきますね。何か話でもあるのでしょうか？・・・ところで。

『実は前日、両親の葬式があって』

『昨日遊びに行ったときピンピンしてたじゃねえか』

『登校中トラックに引かれかけて』

『かけたなら無傷だろうが』

『ゲームやってたよ、悪いか！！』

『悪いわ！！』

いつまで彼らは自分がバカだと証明し続けるのでしょうか・・・？

先生が戻って来て、自己紹介の続きをするように言ってから10分位立ちましたが・・・特筆すべきような事はありませんでしたね。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

・・・おや、雰囲気違いますね・・・何かするつもりでしょうか？

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ・・・さて、皆に一つ聞きたい」

うまく間合いをとり、目を引き付ける。そして引き付けたことを確認したら彼の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭く、廃屋のような教室。

綿がろくに入っていないく、古く汚れた座布団。

薄汚れて今にも壊れそうな卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシート、ノートパソコン、エアコンが各個人に配布されているらしいが　ー不満は無いのか？」

『大ありじゃあっ！！』

確かに差がありすぎると思いますが・・・。

「そこでだ、これは代表としての提案だが　」

なるほど、彼の狙いはこれでしたか。

「
FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思
う」

さて、楽しくなりそうですね。

「観察処分者？何ですかそれは？」

Aクラスへ戦争をしかける・・・転校してきたばかりで戦力差がどれほどかはわかりかねますが、それでも最低レベルのFクラスが最高レベルのAクラスに挑むのはかなり無茶な気がしますね・・・

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

ほかの皆さんも無茶だと・・・って最後の人なにカミングアウトしているんですか。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

同感です、せめて根拠くらいは示していただかないと。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素がそろっている。それを今から説明してやる・・・おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いていないで前に来い」

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

・・・何をやっているのでしょうか彼は・・・というか皆に犯行現場を目撃されているのにあそこまで必死に否定するなんて・・・ある意味すごいですね。

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性職者だ」
ムツツリーニ

「・・・・・・・・！！（ブンブン）」

・・・むつつりに？

『ムツツリーニだと・・・？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠をいまだに隠そうとしているぞ・・・』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・』

・・・ムツツリーニって・・・いったい・・・。

「????」

あ・・・姫路さんもわからないみたいですね・・・ほんとにムツツリーニってなんなんでしょう？

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですか？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだっだ』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらなないな』

誰でしょう、先ほどから変なことを言っている人は。

「木下秀吉だっている」

『おお・・・！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

ふむ・・・情報が集まりませんね・・・しかし、名の知られている人物なのでしょね、彼は。

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

なるほど、名の知られている人物を使って士気の上昇を謀りましたか。ではこの高まった士気を戦争まで維持してー

「それに、吉井明久だっている」

・・・シンー

なに思いつきり士気下げているんですか。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそんな必要はないよね！」

「そうですよ、いくらオチをつけるためとはいえ、肩書きも何もない人の名前を呼んで士気を落とさなくても」

「いや、こいつにも肩書きくらいならあるぞ」「ちよつ優」こいつの肩書きは『観察処分者』だ」

「『観察処分者』？何なんですかそれは？」

「あ、それ私も気になります」

「知らないなら教えてあげるよ盾宮くん、姫路さん。『観察処分者』って言うのはちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「バカの代名詞だ」

「バカ雄二！せつかくの僕のフォローを無駄にするな！」

「フォローは他人にするものですよ吉井君」

「.....」

「バカだな」

「バカじゃの」

「・・・バカ」

「皆してひどいっ!!」

「話がそれだな。観察処分者はな、具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚中でこなすといった具合だ」

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

「しかし・・・それだと処分にならないのでは？強制雑用の分を差し引いても、メリットが大きすぎるのでは・・・」

「ああ、もちろんまだデメリットは存在する。まず試験召喚獣は教師の監視下でないと呼び出せない、よって雑用以外にその力が発揮されることは少ない、さらに試験召喚獣が受けた疲労や痛みの何割かが明久に返ってくるんだ」

「なるほど、つまりただでさえ点数が低いのに（グサッ）召喚獣がやられると痛みが返ってくるためくに使い物にならない（グサグサッ）凄いやつだぜの肩書きというわけですね（グサグサグサッ）」

「そういうことだ・・・ん？おい明久、なに教室の隅で縮こまっているんだ？」

「うん・・・なんでもないよ・・・」

「まあいい、とりあえず俺たちの力の証明として、まずはDクラス

を征服してみようと思う」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・ちょっとやりすぎましたかね・・・」

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員 筆^{ペン}を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー・・・」

「あははは・・・」

す、すごいテンションですね・・・

「よし、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役をはたせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。だまされた
と思っていつてみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「ふっ、わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

そして吉井君はクラスメイトの歓声と拍手に送り出されていった・
・

「で？吉井君が酷い目にあう確立は？」

「99・9%だ」

「ですよ〜」

「あれ？いつの間に？」

Side 明久

「騙されたあつ！」

こ、殺されるとこだった！Dクラスの連中、ものすごい勢いで掴みかかってきたぞ！息を切らせて床にへたりこむ僕に雄二が視線を落とし、

「やはりそうきたか」

平然と言い放った。ブチ殺すぞゴラ。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

去年の春から付き合いがあるけど、いまだに雄二のことはよくわからない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「引きちぎられたんですか？制服がボロボロじゃないですか」

僕の有様を見て、盾宮君と姫路さんが駆け寄ってくれる。ああ、なんて優しいんだろう。ここは心配をかけないようにしないと。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどがかすり傷」

「一応見せてみてください。救急セットくらいは持ってきてありますから」

本当に優しいなあ盾宮君は、どっかの誰かさんとは大違いだ。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田さんまで来てくれた。体は痛いけど、こうやって心配されるのも悪くないね。

「本当にかすり傷ばかりですね、しかし数が多いので絆創膏じゃ大変ですし・・・大げさに見えるかもしれませんが包帯でも巻いておきましょうか」

「うん、平気みたいだね。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・。うちが殴る余地はまだあるんだ・・・」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

あわてて腕を押さえて転げまわ「ああっ！急に動いたら！」へ？

グルグルグルグル・・・

「え？あ、あれ？」

み、身動きがとれない!?

「まったく、巻こうとした包帯に巻かれるとは……」

「まるでミイラ男じゃのう」

「ってみてないで助けてよ二人とも!」

S i d e 優斗

ふう……やっと外し終えましたか……

「ああ……やっと自由になれた……」

「まったく、何やっているんだか。それより今からミーティングを行うぞ」

おや?ほかの場所で行うのでしょうか?扉を開けて外に行っていましたね。

「あの、痛かったらいつてくださいね?」

「ふう……疲れたぞい」

と言って姫路さんと秀吉君が外に出て行く。

「・・・・・・・・（サスサス）」

「ムッツリーニ。覗いていたときの畳の跡なら消えてるよ?」

「・・・・・・・・!!（ブンブン）」

「いえ、今頃否定しても・・・第一あの場面はクラスメイト全員が見ていましたよ?」

「・・・・・・・・!!（ブンブン）」

「これだけバレているのに否定し続けるなんて、ある意味すごいと思う」

「・・・・・・・・!!（ブンブン）」

「・・・何色だった?」

「水色」

即答ですか。

「・・・それ、覗いたって自由しているようなものですよ」

「・・・・・・・・!!（ブンブン）」

どれだけ認めたくないんですか。

「ほら吉井。あんたも来るの」

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

・・・ふう、僕はその間なにを――

「あれ？盾宮は来ないの？」

・・・はい？

「あれ？てつきり来るもんだと思っていたけど・・・」

「あ、僕も」

「あの・・・行ってもいいんですか？」

「「へ？」」

「いえ・・・友人関係でもないのに参加するのはと・・・」

「何いつてんのさ。もう友達じゃん」

「・・・はい？」

「え？ちがうの？僕は友達だと思ったのになあ・・・どこで間違っ
たんだろ？」

「え、あ、あの・・・」

「気にすることないわよ盾宮、こいつはそついうやつなのよ」

「・・・・・・・・（コクン）」

「・・・・・・・・」

「あれ？・・・」

「・・・フツ、面白い人ですね」

「え？なに？」

「いえ・・・何でもありませんよ明久君」

「あ、うん・・・って、今明久って」

「友達なら名前で呼ぶくらい当然ですよね？」

「へ？結局友達だったの？」

「まあ・・・そついうことにしておきましょう。それより早く行かないとみんなを待たせてしまいますよ」

「そうね、はやくいきましょ」

「・・・・・・・・（コクン）」

「????」

転校して初めての友達が、いつの間にかできているなんて。フフッ、幸運ですね。

「食事はきちんととりましょう」（前書き）

バカテスト 「第二問」

国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（２）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（１）弘法も筆の誤り』

『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。ほかにも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

盾森優斗の答え

『（１）猿を木から射落とす』

吉井明久の答え

『（２）泣きつゝ面蹴ったり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

「食事はきちんととりましょう」

今僕らは、屋上に向かって坑内を歩いている。（ちなみに、先に行っていた三人は僕が来たことをさも当たり前のことのように捕らえていたので、少し安心した。あと、秀吉君と雄二君に名前で呼んで良いと言われました）・・・っと、考え事をしているうちに屋上に着いたみたいですね。

「明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に関戦予定と告げて来たけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼くらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや。一応食べているよ」

・・・一応？

「・・・あれは食べているといえるのか？」

「どういう意味ですか？もしかしてカロリー○イトみたいな簡易食料だけで済ましているんじゃない？」

「いや、こいつの主食ってなー水と塩なんだ」

予想外でした。

「失礼な、ちゃんと砂糖だって食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ・・・」

「

舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

「というか、よく生きてくれましたね・・・」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「それは自業自得というか・・・何というか・・・」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

「・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「え？」

「吉井君、その文字は現代で使われていませんよ」

「ほ、本当にいいの？」

「はい。明日のお昼でよければ」

「やったあ！僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ」

「！」

「・・・いつ死んでもおかしくないような生活していますね・・・」

「・・・ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけ《・・・》に作ってくるなんて」

「おや、この棘のある言い方は・・・なるほど、彼女も吉井君のことが・・・」

「あ、いえ！その・・・皆さんにも・・・」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい。いやじゃなかったら」

「それは楽しみじゃのう」

「・・・（コクコク）」

「・・・お手並み拝見ね」

「ありがとうございます、姫路さん」

「今だから言うけど、僕、始めて会う前から君の事好きー」

「吉井君、こんなところで言っても、成功率は0%ですよ」

「そして今振られると弁当の話はなくなるぞ」

よし、これでムードや面白さ0の告白を阻止できましたね。後は吉井君がなんと言ってごまかすか――

「……にしたいと思っていました」

何言っているんですか、そして何やりきったような顔をしているんですか。

「明久。それではよく場うをカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「なぜその言葉を選んでしまったんですか、明久君……」

「明久。お前はたまに俺の創造を超えた人間になる時があるな」

「だって……お弁当が……」

どれだけ食に困っているんですか。

「さて、話しがかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

あ、忘れてましたね。

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「確かに……ニクラス上というのは、少しきついものがあるのでは……」

「まあな、当然考えがあつてのことだ」

「ほう・・・たとえば？」

「いろいろと考えはあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスは上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子をよく見てみる」

「え〜と・・・美少女二人と馬鹿が二人と常識人が一人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええ!？雄二が美少女に反応するの!？」

「失礼な、少なくともあなたよりは頭がいいですよ!！」

「優斗まで!？しかもさりげなく馬鹿にされた!？」

「・・・・・・（ポッ）」

「ムツツリーニまで!？どうしよう僕だけじゃツツコミきれない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表に優斗にムツツリーニ」

「そ、そうだな」

「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入れたいんだけど」

「ま、要するにだ。姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかとやり合っても意味がないってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるて厳しいの？」

「ああ、確実に勝てるとはいえないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「いえ、それだと僕が困るんですよ」

「へ？どうしていきなりAクラスに挑むと優斗が困るのさ？」

「まだ僕は召喚獣の操作に慣れていない、すぐにAクラスに挑んだら足手まといになるんですよ」

「ああ、なるほど」

「全体を通して見れば・・・まず初陣の景気ずけ、僕と同じようにほかの人たちにも召喚獣の操作に慣れさせるため、そして姫路さんがFクラスにすることが知れていないことを利用した奇襲で勝つことができるのがDクラスだった、とまあこんなところですかね」

「・・・もしかして優斗って頭いい？」

「こういうことが得意なだけですよ、あっていますか雄二君？」

「あ、ああ。ほとんどな、他にも打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスでもあるかな」

「なるほど……ということは施設や友人関係を利用してAクラスと対等に戦う……といったところですか？」

「まあな。まあ、後でのお楽しみってやつだ」

「あ、あのー！」

「ん？どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それが。それはついさっき、姫路のためにつて明久に相談されてー」

「それはそうとー！」

ふうむ……さえぎってしまいましたか、面白い話が聞こえるかと思いましたが……残念ですね……

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

「・・・根拠は？」

「根拠？簡単だ。ウチのクラスはー最強だ」

・・・根拠になっていませんね・・・ですが。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスのやつらを引きずり落としてやるかの」

「・・・（ぐっ）」

「が、頑張りますっ」

士気を高めるには上策・・・と言ったところでしょうか。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

さて・・・腕が鳴りますね。

「これが僕の召喚獣ですか・・・」

「はぁ・・・初陣が前線とは・・・少し億劫おっくうになりますね・・・」

「まあまあ、気にするでない」

現在、僕と秀吉君率いる前線部隊20名が廊下を進軍している。

「けど、ようやく僕の召喚獣の装備がわかりますね」

「ん？なんじゃ、知らなかったのか？」

「ええ。この学校に来たのは編入テスト以来ですからね」

「ふむ、それは楽しみじゃー」

「いたぞ！！Fクラスだ！！」

「ーと、見つかってしまったみたいじゃな」

「そうみたいですな」

「いくぞ！Fクラスのバカども！」

『サモン
試験召喚っ！』

呼び声に応じてDクラスの人たちの足元に魔方陣が現れ、そこから召喚獣が姿を見せる。

「こちらもいくのじゃ！召喚！」^{サモン}

『召喚っ！』^{サモン}

今度はこちらがわに魔方陣が現れ、召喚獣が飛び出す。

そして現れた召喚獣たちが戦い始めた。

「おりゃあ！」

「くっ」

「くらえ！」

「ぐはあ！」

「なるほど、これが試験召喚戦争ですか」

「つて、見てないで早く参加するのじゃ優斗！」

「わかっていますよ・・・コホン、それでは――召喚！」^{サモン}

そう言ったとたんに足元に魔方陣が現れる。そこから――左手に木でできたような弓を持ち、腰に矢筒をぶら下げ、動きやすそうな服装に身を包み、両目にゴーグルを装着した、僕の姿をデフォルメしたような召喚獣が現れる。

「へえ、僕の召喚獣は弓使いですか。ではさっそく・・・む」

「どうしたんじゃ！？早くせい！」

「いえ、今弓を放ったら味方に当たりそうで・・・」

そう、現在乱戦中なので、敵も味方も入り乱れて戦っている。下手に弓を放ったら味方に当たってしまうのだ。

「では、やくたたずではないか！」

「そうみたいですわ・・・どうしましょう？」

「ワシに聞くな！」

『なんだあいつ？』

『転校生みたいだな、見たことがない』

『まずあいつからやつちまえ！』

おや、乱戦を外れてこっちに三名ほど来ていますね・・・では。

「ゆ、優斗だいじょう『ヒュンヒュンヒュン！！ドスドスドス！！』
ぶ・・・？」

『Dクラス生徒×3 VS 盾宮優斗』

総合科目 0点 VS 2013点
『』

「言い忘れてましたが・・・弓は得意なんですよ」

『ば、バカな・・・』

「戦死者は補習だ！」

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たつぷりと指導してやるからな」

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐えきれない！』

『嫌だ　！死にたくないー！！』

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるう」

『『『お、鬼だ！誰か、助けっ　ーイヤアア　ー（ボタン、ガチャ）』』』

・・・なるほど、一つ分かったことがあります。

「あの先生の名前は鉄人と言つのですか・・・」

「優斗、それはあだ名じゃ、そしてつれていかれたやつらにはノーコメントかの？」

ノーコメントでお願いします。

Side 明久

・・・ふむふむ、今の声を聞いて試召戦争の雰囲気はだいたいわか

った。

「島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？作戦？何て伝えんの？」

「総員退避、と」

「この意気地なし！」

そしてチヨキで目を殴られた・・・って。

「目が、目があっ！」

「目を覚ましなさい、この馬鹿！アンタは部隊長でしょう！臆病風に吹かれてどうするのよ！」

その覚ますべき目に激痛があっ！

「いい、吉井？うちの役割は木下と盾宮の前線部隊の援護でしょう？アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない」

島田さん、君はなんて男らしいんだ！なぜだか涙が止まらないよ！
（あと激痛も）

「ええ。それに、そこまで心配することもないわ。個別戦闘は弱いかもしれないけれど、これは戦争なんだから多数対一で戦えば良いのよ」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「うん。その意気よ、吉井！」

と意気込んでいると、報告係がやってきた。

「島田、前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

さっきと言葉が全然違う！

「吉井、総員退避で問題ないわね？」

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ」

くるりとFクラスへ方向転か――

「あ、あと盾宮部隊長からの伝言が」

「伝言？悪いけど僕らは前線には行けないと――」

「えー」逃げたりしたら末代まで呪い続けますから覚悟してくださいね』と」

「全員突撃しろぉーっ！」

気が付いたら戦場に向かって全力ダッシュしていた。それもこれも、友達を思つてのこと。やっぱり友達つて大切だよな！
と、前方からこちらに向かってくる美少女を発見！

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

ああなんだ。秀吉じゃないか。なんていうかいつ見ても可愛い・・・

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておる。点数もある程度は残つておるわい」

「そうなの？・・・つてあれ？優斗は？」

「優斗ならまだ前線じゃ、点数がある程度残っている者たちと戦つておる」

なんだつて！このまま僕らが行くのが遅くなつて優斗がもしやられてしまったら・・・

「末代まで呪い続けられる！」

「・・・なんなんじゃそれは？」

「気にしないでいいわ木下。それよりも早くテストを受け直してきてたら？」

「そうじゃな。ではあとは頼むぞ明久」

「わかった。それじゃあね秀吉」

秀吉を見送ったあと、僕は急いで優斗のいる前線へ向かった。もちろん友情のためだよ！決して呪われたくないから急いでいるわけではないからね！！（汗）

「あれ？あそこで戦っているのって盾宮じゃない？」

島田さんの指差した方を見ると、確かに三体の召喚獣に包囲された優斗が……って。

「ゆ、優斗！？大丈夫！？」

「ん？……ああ、明久君と島田さんじゃないですか。もう中堅部隊との合流時間ですか？」

「そうだけど。っていつてる場合じゃない！今すぐ加勢するよ！」

「その必要はありませんよ。たった今――」

ドサドサドサッ！

「――終わったところです」

『Fクラス 盾宮優斗 VS Dクラス男子×3

総合教科 938点 VS 0点』

「「……は？」」

「いやあ、皆さんお強いですね。2000点ほどあったのにここま

で減らされてしまいました」

に、2000点！？それってどう考えてもFクラスの点数じゃ無いよね！？

『バカな・・・何者なんだあいつ』

『ふざけるな！こっちはもう10人も殺られているんだぞ！』

『俺、この戦いが終わったら告白しにいくんだ・・・』

最後の人ー、死亡フラグ立ってるよー

「前線部隊！中堅部隊と交代します！今すぐ撤退を開始してください！」

『了解！』

「あとは頼みましたよ・・・って。明久君、なにボーンとしているんですか？」

「あ、ごめんごめん。ちょっと考え事してて」

「・・・まあいいでしょう、さて僕は点数の補給があるからこれで失礼します。あとは頼みましたよ」

「わかった！ここは任せてよ！」

「では」

タッタッタツ・・・

優斗も頑張っていたみたいだし、僕も頑張らないと！

「戦争には犠牲がつきものである（今回は明久君）」（前書き）

バカテスト 「第三問」

英語

問 以下の英文を訳しなさい

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
」

姫路瑞樹の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはt h i sだけですか。

吉井明久の答え

「 「 * x 」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

盾宮優斗の答え

「私は今朝、兄にラリアットを叩きつけてから登校しました」

教師のコメント

何をどう訳したらこんな文になるのでしょうか。

「戦争には犠牲がつきものである（今回は明久君）」

「それで先程の放送はいつたいなんだったんですか雄二君」

「前線拡大阻止の作戦だ」

現在廊下を進軍中の僕らの話題に上がっている放送とは、先程僕がテストを受けている時に流されたもので《船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事故があるそうです》といったものだ・・・これはすぐにデマだとわかりそうな事ではないでしょうか。

「船越先生とはいったい・・・？」

「数学の教師でな、婚期を逃して、生徒に単位を盾に交際を迫るような先生だ。おそらく戦争終了までも待ち続けるからな。前線を広げられなくて済む。」

「なるほど・・・となるとその指示をだしたのは・・・やつぱり？」

「ああ、俺だ」

「・・・まあ、雄二君のことです。普通の作戦は出さないと思いましたが・・・」

「なんだ？不満か？」

「ええ、あの放送を聞いた時の明久君の絶望した顔が見れなかったのが悔しくて・・・」

「・・・優斗もなかなか鬼畜じゃの。」

「・・・・・・・・（コクコク）」

「面白いものを見たいと思うのは人の性さが・・・仕方がないじゃないですか」

「いや、絶望した顔を面白いものと言いきれるのがどうかと思うのじゃが・・・」

「フフツ・・・おや、前線部隊が見えてきましたよ」

「む、本当じゃの」

「・・・結構殺られていますね、あと5、6人しかいない」

「ヤバイな・・・明久、あと少し持ちこたえろ！」

「・・・・・・・・急ぐぞ」

先程酷い事を言ったような気がしましたが、友人を見殺しにするわけにもいきませんね。とりあえず急いで合流しましょう。

『Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手を――あがあつ
』！

って何をやっているんですか！助けにいくのがバカらしくなるようなことをしないでください！

『この部隊長はバカだ！俺一人で十分だから、皆は残りを！』

ヤバイですね。気付かれました（吉井君がバカだということが）

『くたばれ吉井！』

『そうはいくかつ』

ヒョイツ

ガッ

ドサア！

『なっ！？』

・・・うまいですね・・・回避と同時に足払いとは・・・しかし他の召喚獣に比べて動きが良いような気が・・・

『ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！』

『なにいつ！？』

霧島さん？また新しい名前ですか。しかし戦争中だというのにこんな嘘に敵も味方も引つ掛からせるとは、かなり有名な女性のようにですね。

・・・ムツツリー二君、スピードが上昇していますよ。そんなに気になるんですか？あと雄二君、なぜスピードダウンしたんですか？急ぎますよ？・・・あれ？明久君？何で上履きを手に持っているん

ですか？
ガシャアアン！

ってなぜ勢い良く窓ガラス割っているんですか！

『な、なんだ！？なにことだ！？』

『うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！』

って今度は消火器！？

ブシャアアッ！

『島田さん、キミはなんてことを！』

島田さんに罪をなすり付けようとしていませんか！？

『Fクラスの島田め！何て卑怯なやつなんだ！』

『許せねえ！彼女にしたいくない女子ランキングに載せてやるからな
！』

『そつだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる！』

・・・島田さんあなたの居ないところで悪評が広まっていますよ。

ガスッ！

シュワアアアー――

今度はスプリンクラー・・・器物破損で訴えられてもおかしくない

ですね・・・

・・・近くまで来ましたし、とりあえず援護しますかね。

「待たせましたね、吉井君。さてと・・・召喚^{サモン}！」

「あ！優斗！」

「くそっ、じゃまするな！」

「いやですよ。そして・・・（ヒュン！ドスッ！）・・・終わります」

『Dクラス 中野健太 VS Fクラス 盾宮優斗
科学 0点 VS 371点』

『「・・・はあ！？」』

「・・・あれ？何かおかしかったですか？」

「いやだってその点数！」

「点数が何か？」

「明らかにAクラスレベルじゃぞ！？」

「へえーそうなんですか」

「な、なんだあいつ！」

「あの召喚獣・・・間違いない！前線部隊の言っていた弓使いだ！」

「バカな！あの中野が一撃で・・・！」

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

「おっと。そう簡単には逃がしませんよ！」

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン
ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

『げっ！あいつ適当に射つてきやがった！』

『来るな！来るなあ！』

『総員退避！！』

・・・やり過ぎましたかねえ。

「追いますか？」

「深追いはするな。俺たちも一旦戻るぞ」

「優斗。あんな点数なのにどうしてFクラスなの？」

「科学は得意なだけですよ。それにちょっと良くなりましたしね。
苦手科目だと全然点をとれませんしよ」

「へえ」

さてと、そろそろ決着をつけますか。

「いつそんなものを調達したのですか？」

Side 明久

教室に戻り、科学のテストを受け直した後、

「明久、良くやった」

「本当に良くやりましたね明久君」

と、総大将である雄二と、友達である優斗が褒めてきた。

優斗のは素直に褒めてくれているんだろうけど、こいつは・・・

「・・・校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バッチリな」

やっぱり！僕の不幸を喜んでやがる！・・・けど今肅清をくわえるべき相手は・・・

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

僕が今最も逢いたい彼の所在を確かめる。どこかに隠れているのか？

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

おおっ！もうすぐ戻ってきてくれるんだ！よし、大丈夫、包丁は家

庭科室からパクってきたし、靴下には砂も詰めた。

「やれる、僕なら殺れる・・・！」

「吉井君、殺人は犯罪ですよ」

優斗が何か言っているが後回しだ。

「ちなみに・・・」

今の最優先事項は――

「あの放送、雄二君の指示ですよ」

雄二だあつ！

「シャアアッ！」

よし、殺つ

「あ、船越先生」

ちいつ！撤退だ！

急いで掃除用具入れに飛び込む。

「・・・危機回避能力は高いみたいですね」

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校している生徒の姿も見え始めたし、

頃合いじやろう」

「……………（コクコク）」

「おつしゃ！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

教室から皆が出て行く気配がする。くそっ！雄二が逃げてしまう！

「明久君」

ん？優斗？

「船越先生なら来ていませんよ、安心して出てきてくださいね」

足音が響き、教室に人の気配は完全になくなった。

- へ？

Side 優斗

さて、明久君の誤解も解き、戦闘にも追い付けた。あとは……

「お前弓使いだな！」

「厄介だが俺たちなら倒せる！」

「さつきはよくもやってくれたな！」

「個々で会ったが百年目……」

「正々堂々と勝負だ！」

「・・・5VS1のどこが正々堂々なのか・・・」

この人たちを倒すことですね。

「うるさい！これは戦争だ！」

「そうだ！勝てばいいんだ！」

「勝者こそ正義だ！」

「後で後悔するなよ！」

「フルボッコにしてやるよ！」

何故でしょう。無性に疲れるのですが・・・。

「はぁ・・・で？科目は何ですか？」

「数学で勝負だ！」

「悪いが、確実に勝たせてもらう！」

「数学は得意なんぞな！」

「Aクラスレベルなんてデマだろうしな！」

「Dクラスの数学5人組と呼ばれたかった俺たちが相手だ！」

「って呼ばれてないんじゃないですか」

それに数学は・・・

「う、うるさい！召喚サモン！」

「」「」「召喚サモン！」「」「」

「ふう、では。召喚サモン」

『Dクラス男子×5 VS Fクラス 盾宮優斗
1217点 VS 617点』

得意分野なんですよ。

「なんなんだこの点数は!?!」

「うろたえるな!合計ならこっちの方g」えいつ「(ドシューッ!)
ああっ!俺の召喚獣がつ!」

「山畑!」

「くそっ!くらえ!」

ヒョイツ

「おっと」

「はっ。近接だとなにもできねえじゃねえか」

「いまだ!突撃!」

「オリヤアア!」

「くらえええ!」

「・・・確かに近接は厄介ですね・・・」

どうでしょうか・・・あ。

「弓でなくてもいいんですたね、戦えれば」

とりあえず来た敵を

蹴り飛ばします。

「んなつ！」

「おや。後ろの召喚獣にもあたってくれましたか。良いですよっ
！」

ヒュン！グサグサッ！

『Fクラス男子×5 - 3 VS Dクラス 盾宮優斗
531点 VS 615点』

「俺の召喚獣があっ！」

「バカな！西畑と福畑までやられるなんて！」

「チクシヨウ！仇は俺たちがとってやる！」

「竹畑・・・雨畑・・・」

「・・・畑集団？」

「「「「その名称で呼ぶなあ！」「」「」

気にしてたんですね・・・すみません。

「だがどうする？ 奴にお前らだけで勝てるのか？」

「確かに厳しいな……」

「どうすれば……」

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

「おお！本隊だ！」

「これなら勝てる！」

「いける．．．いけるぞ！」

「奴に制裁を下せるんだ！」

「天は我らを見放さなかった！」

「よし行くぞ！弓使「あゝ」なんだ！」

「もう終わってますよ」

「は？」

0点 VS 613点

「なに！いつの間に！」

「Dクラスの本隊の方を見ているときに・・・」
「不意討ちとは卑怯な！」

「5VS1よりましだと思うのですが・・・」

「戦死者は補習だ！」

「て、鉄人！」

「どっから出てきやがった！」

あ、同感です。

「調子に乗るなよ盾宮！いずれ第二、第三の 畑が・・・」

「どこの魔王ですかあなたたちは。あとすでに第二から第五まで出てますよ」

「さあ行くぞお前たち」

「」「」「嫌だああ！！」「」「」

「・・・一人で5人を引きずっていくなんて・・・どんな腕力ですか・・・」

軽く恐怖すら覚えます。

「さて、本隊を叩きますか」

『Dクラス代表、平賀源二討死！』

「ね？」

あれ？もう終わりですか？

「言い訳はよく考えてから言いましょう」(前書き)

バカテスト [第四問]

数学

問 以下の問に答えなさい。

『(1) $4\sin X + 3\cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい』

『(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、?』
?の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$

? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 』

姫路瑞希・盾宮優斗の答え

『(1) $X = \pi/6$

(2) ?』

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\pi/6$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) X 〃 およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは正解に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生はこれまで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

「言い訳はよく考えてから言いましょう」

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ、アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本雄二サマサマだな！』

『そういえば盾宮も活躍してたよな』

『そういえばあの畑集団を得意な数学で倒していたもんな・・・』

『坂本と盾宮万歳！』

『姫路さん愛しています！』

・・・そんなに喜ばれると照れますね・・・しかしまた姫路さんにラブコールを送っている人がいませんでしたか？懲りない人ですね。

・・・あれは・・・明久君？まだ雄二君の命を狙っていたんですか？仕方がないですね・・・

「死ねえ！雄二！」

ガッ

「ストップですよ、明久君」

「ゆ、優斗！？離せっ！僕の人生を狂わせた奴には地獄を見せないといけないんだっ！」

「先ほど島田さんに罪を押し付けていた方が何をいつているんですか？」

「・・・それはそれ、これはこれだあ！」

「小学生レベルの言い訳をしないでください・・・よっ！」

「ぐあっ！」

手首をひねって包丁を落とさせました。危険物ですからね。怖い怖い。

「・・・優斗、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「その皆の中の一人を殺そうとしていませんでしたか？」

「・・・僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いっ！」

「今、何しようとしてやがった」

おや、雄二君の参戦のようですね。

「も、もちろん」

「雄二君の殺害ですよね？」

「そうそう、それそ手首がもげるほどに痛いっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「では、藁人形と五寸釘も」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「チッ」

ふむ・・・せつかくこの間読んだ本に書かれていたことを試そうか
と思ったのですが・・・えーと確か・・・。

「・・・生爪・・・」

「・・・丑の刻参り・・・」

そうそう確かそんな名前 って明久君？何故がたがたと震えて
いるんですか？

「まさか姫路さんがFクラスだなんて・・・信じられん」

「あ、あの、さっきはすいません・・・」

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺たちが
悪いんだ・・・ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日は
こんな時間だから、作業は明日で良いか？」

「もちろん明日で良いよね？雄二？」

「いや、その必要はない」

「え？なんで？」

「Dクラスは目的ではないからですよ」

「優斗、それはどういうこと？折角普通の設備を手に入れることができたのに」

「忘れましたか明久君？目標はAクラスですよ？」

「でもそれなら、なんで標的をAクラスをにしないのさ。おかしいじゃないか」

「・・・はあ。今日の昼話したでしょう。もう忘れたのですか？」

「まったくだ。だからお前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんで愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「半端にリアル・・・ということは言われたのは近所の・・・小学生とかですか？」

「・・・人違いです」

「・・・あれ？本当だったんですか？」

「まさか・・・本当に言われたことがあるのか・・・？」

まさか本当に言われているとは・・・

「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺たちにはありがたいが・・・それでいいのか？」

「もちろん、条件がある・・・俺が指示を出したらBクラスの室外機を動かなくしてもらいたい。それだけだ。」

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦での作戦に必要なんでな」

ふむ・・・室外機を壊す・・・Bクラスのエアコンが目的・・・熱や温度を上げて召喚獣の操作をさせにくくする？・・・だめです、窓を開ければたいした問題にはならない・・・窓を開けさせる？しかしなんの意味が

「優斗？大丈夫？」

「　　って明久君？どうしたんですか？」

「いや、優斗こそなに突っ立ってたのさ。もう皆帰り出してるよ？」

「ああ、すいません。考え事をしていました」

「あ、そうなんだ。じゃましちゃった？」

「いえ、あのままだと学校が施錠されるまであしていたと思いますから。ありがとうございます」

「施錠されるまでって・・・じ、じゃあ雄二を待たせているし先行

くね
「

「はい。では、また明日」

「じゃあね」

「・・・ふう、では僕も帰りますか」

えつと鞆を・・・おや？あれは・・・

「姫路さん？」

「た、盾宮君!？」

？どうしたんでしょうか。あんなに慌てて・・・ん？あれは・・・
便箋と封筒・・・おそらくラブレター用・・・ということとは。

「すいません。吉井君宛のラブレター製作中に」

「!？な、なんでわかったんですか!？」

「吉井君相手だと、ちょっと態度が違うんですよ。それでなんとなく・・・」

あからさまに違いましたが。

「うつつ・・・坂本君も知ってましたし・・・私ってそんなにわかりやすいんでしょうか・・・」

ええ、かなり。

「そういえば・・・明久君とは会いませんでしたか？先ほど教室に向かったと思いますが・・・」

「えっと・・・さっき席を外してて・・・」

「すれ違いになった、と」

「あ、あのっ！この事は」

「わかっていますよ。この事は明久君には黙っていますので」

「は、はい。よろしくお願いしますね」

「ではこれで。また明日。」

「はいっ。明日」

ん？あれは・・・。

「明久君？どうしてここに？」

「あ、優斗。あゝ実は教科書忘れちゃって」

「そうですか。ではまた」

「うん。じゃあね」

ふう、では帰り　あれ？姫路さんの事言い忘れてませんか？・・・
・まあ良いでしょう（放任主義）

さて、突然ですがここで僕の家について説明しておきます。

僕の家族は、母、父、一応兄、そして僕の四人家族です。

母は“イーシスグループ”（超巨大企業）の創始者の娘で代表取締役。戦国時代から名を残し続ける、盾宮家の跡取り娘。その影響で、僕は昔から弓術、剣術、薙刀、乗馬等々・・・をやらされてきました。（そのお陰で弓が上手いのですが）

父は大学の教授。かの有名なハーバードに在籍しています。父の専門が数学だったお陰で、数学が得意になりました・・・が遺伝なのか、父が苦手な地理や歴史が苦手になりました。（あと英語も無理です）

あと兄は・・・割愛します。

さて、何が言いたいかと言うと。

母が大きな会社の重役でお金が貯まる

父が計算が得意で昔から家のお金をきちんと管理しているため、お金が貯まる。

となると、必然的に・・・。

「ただいま」

『『『お帰りなさいませ、優斗様』』』 (総勢50名の大合唱)

・・・こうなります。

「料理に薬品は使いません!」

・・・はあ・・・また遅刻ギリギリですよ・・・それもこれも母さんが明日の学校の事など考えずに特訓なんかするから・・・はあ・・・まあ、挨拶はきちんとしないといけませんからね。元気を出して。

「おはようございま」

「うわあああ!」

ゴスッ!

グハアッ! み、鳩尾に誰かの頭が・・・!

「ん? あれ? 何かにぶつかったような・・・って優斗!? 大丈夫! ?」

「あ、明久く・・・ん(ガクッ)」

「優斗!? 大丈夫!? 優斗! 優斗! !」

あ・・・いし・・・き・・・が・・・

「んで、そのまま保健室に運ばれて今に至ると」

「ええ・・・まあ、昨日の戦争のダメージは皆無ですし、次の戦争には影響が無いと思いますよ」

「ううつ・・・ごめん、優斗」

先ほどの明久くんの体当たり（本人にはその気はなく、船越先生から逃げるために勢い良く扉を開けて逃げたところ、ちょうど僕が来て激突した）によって気絶した僕は保健室に運ばれ、少し前に目覚めて教室に帰って来たら、すでに四教科目のテストが終了していたという訳です。

「よし、昼飯食いに行くぞ！」

「いいですね、昔から『腹が減っては戦はできぬ』なんて言われてましたしね」

「今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

「・・・食べ過ぎても戦はできませんよ」

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「人数が多いほうが美味しく食べられますしね」

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりをいただきますかな」

「明久くん、どう言おうとも塩水ですよ」

・・・あれ？何かを忘れているような・・・。

「あ、あの。皆さん・・・」

ん？姫路さん・・・あ。

「もしかして昨日のお弁当・・・ですか？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

「迷惑なもんか！ね、雄二！優斗！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「ええ、ありがとうございます」

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！！！！』』

『宜しい。これよりー 二ーF 異端審問会を開催する！』

「す？」

いきなりなんなんですか？いつの間にか覆面まで被って。

『罪状を読み上げたまえ』

『はつ。須川会長。えー、被告、吉井明久、坂本雄二、ムッツリー
二、盾宮優斗は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この
者達は我らが教理に反した疑いがある。この者達の罪状は賄賂の受
け取り及び背信行為である。先ほど同クラスの姫路瑞希からお弁と
賄賂を受け取るうとしたところを現在包囲中であります。賄
賂の中身を確認した後、彼らに対して然るべき対応をー』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『手作りお弁当を食べるなんて羨ましいであります！』

『うむ。実にわかりやすい報告だ』

「・・・秀吉君が対象外なのはおいといて、なぜそんなことで裁か
れねばならないのですか？そもそも教理に反したって、その教団に
入っていないければ対象外なのでは？」

「甘いな！この学校にいる時点で、我らFFF団に加盟していると
同じ事なのだよ！」

「どんな悪徳教団ですか・・・まったく」

「もういい、黙らせる!」

「キシヤアア!」

クラスメイトの・・・確か田中君でしたっけ・・・がハサミを持って襲いかかってくる・・・やれやれ。

「武器を持つたくらいで・・・いい気にならないでください!」

ゴスッ（回し蹴りが顔面に入った音）

「グボアア!」

『『『!!!!』』』

「やれやれ・・・この程度ですか?」

「くそっ! かかれ!」

『『『うおおおお!』』』

「はぁ・・・学習しませんね・・・皆さん先に屋上にでも行っておいってください」

「おい、さすがにこの数は・・・!」

「優斗! 危な」

ドギヤ! バキッ! ゴガッ! ボスっ! グギヤ!

（上から順に、蹴り上げ、肘鉄槌、関節外し、崩突き、掌手）

『『ギヤアアア！』』』

「ふう．．．ん？雄二君、明久君、何か言いましたか？」

「．．．．何でもない」

「???何か言ったのは確かなはずですが．．．まあいいでしょう。

「まあ、ここは任せてください」

「．．．わかった。さあ皆、早く行こうか」

「．．．そうだな。じゃあ飲み物でも買いに行くか」

「あ、おい！待て！」

「おっと、ここは通しませんよ」

「多人数は久しぶりですね。つい先日やったSP500人組み手よりマシですが。ああ．．．小六のころのSP10人組み手が懐かしい．．．。」

『『『キシヤアアア！！！！』』』

「．．．ま、早く倒して合流しますか。」

ふう、遅れてしまいました。やはり、クラスメイトだからって手加減したのが不味かったのでしょうか……。

「さて、屋上につきましたね」

お弁当がどれ程残っているのか……気になりますね。

「皆さん、遅れてしまいました」

「あつ！優斗！」

「よ……う……ゆう……と……」

……雄二君？顔色が悪いですよ？何があつたのですか？

「お弁当は……って空？」

「ああ、ごめん優斗。実は雄二が食べちゃって」

「ああ、食べ過ぎですか。いけませんね、顔色が悪くなるまで食べるなんて」

しかし……食べ物が無いというのは……辛いですね。

「まあ、食べてしまったものは仕方がないですし。売店で何か買ってきますよ」

「それが良いと思う」

「あ、あの。デザートで良ければありますよ?」

「」「」「!?!?」「」「」

「ありがとうございます。皆さんもどうですか?」

「い、いやっ。僕らはお腹いっぱいで!」

「そ、そうじゃ!全部食べて良いぞ!」

「………(コクコクコク)」

「……もうなにも入らねえ……」

皆さんそんなに食べたんですか?まあ僕の方まで食べていれば当然かもしれませんね。しかしやけに焦ってますね。

「じゃあお言葉に甘えて。いただきます――」

「あっ!ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ。今から取ってきますねっ!」

「あっ。大丈夫ですよってもういませんね……」

ふむ。先ほどの乱闘でお腹が空きましたね……。

「・・・姫路さんには悪いですが先に頂きますかね」

容器を傾けて一気にかきこむ。

「ふむ、なかなか美味しい　ゴブファツ！」

な、何ですか・・・この・・・料理は・・・。

「・・・雄二」

「・・・なんだ？」

「・・・さつきは無理矢理食べさせてゴメン」

「・・・わかってもらえたならいい」

「・・・大丈夫かの、優斗」

薄れ行く意識の中でそんな声を聞いた気がします。

・・・今日は厄日ですか。

「腕輪・・・そういえばそんな物も・・・」(前書き)

バカテスト [第5問]

物理

問 以下の文章の()に正しい言葉を入れなさい

『光は波であつて()である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです

盾宮優斗の答え

『キン○ダム○ーツの主題歌』

先生のコメント

君だけはまともだと思っていました

「腕輪・・・そういえばそんな物も・・・」

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇の雄二君が士気上昇のための演説をしている。まあ、士気は十分高いのですが念のために。

・・・昨日はあの後どうなったのかですか？・・・僕はあの姫路さんの料理を食べた後、気絶してしまい、目が覚めたのは放課後でした・・・つまり僕は、今日やった苦手教科の得点しか回復していない訳です。

・・・しかも帰りが遅くなったとかで昨日の訓練はいつもより厳しいものになってしまいました・・・本当に昨日は厄日だったみたいですね・・・。

キンコンカンコン

・・・おや、昼休みが終わったみたいですね。さて今から戦争です。

「よし、行ってこい！目指すはシステムディスクだ！」

『サーイエッサー！』

今回の指令はBクラスを教室に押し込む事。よって廊下の初戦は確実に取らねばなりません。

「いたぞBクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

数は10人・・・様子見といったところですね。

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗
総合 1943点 VS 764点』

点数差が酷いですね・・・。

『Bクラス 金田一祐子 VS Fクラス 武藤啓太
数学 159点 VS 69点』

『Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博
物理 152 VS 77点』

単教科ならまだいけますね。数学に教科を絞りますか。

「さて、僕も戦闘を――」

「来たぞ！弓使いだ！」

「――せめて名前で呼んでくれませんか？」

しかし多少ながらも有名になっているようですね。

「優斗、いきなりだけど・・・」

「わかっています。が、その前に」

「ん？どうかした？」

「いえ、ちよつといけに・・・では無く陽動をやってくれませんか？」

「今、確実に生け贄って言おうとしてたよね!？」

「で？やりますか？」

「嫌だよ！確実に崖つぶちに立たされるじゃないか！」

「失礼な。僕は友人を崖つぶちになんて立たせませんよ」

「え？そうなの？」

「ええ、もちろんです。僕がやるならホオジロザメの群れのど真ん中に縄で逆さ吊りにするだけですよ」

「悪化してるよ！それ確実に悪化してるよ！」

「安心して下さい。縄は人0・9人分を吊るしても切れないものを使用しますから」

「0・1人分足りないんだけど!？」

「お、遅れ、まし、た・・・。ごめ、んな、さい・・・」

「ああ、姫路さん。大丈夫ですよ、明久君で時間潰ししていましたし」

「せめて『明久君と』って言うてくれないかな!？」

「クソッ、姫路瑞希まで来たぞ！」

やはり情報が伝わってます、警戒しているようですね。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「は、はい。行って、来ます」

「では僕も行きますかね」

さて、補充しきれない僕がどこまで戦えるか・・・。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

ああ、数学は長谷川先生でしたか。覚えておきましょう。

「律子、私も手伝う！」

やはり姫路さんは潰しておきたい存在のようですね、ならば。

「姫路さん僕も参加します」

「あ、はい。お願いします」

『試獣召喚！』

幾何学的な魔法陣と召喚獣が登場する。それにしても似ていますね、

召喚獣と僕らの顔。

「あれ？姫路さんと優斗の召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので・・・」

「？ 結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

アクセサリー・・・そういえば腕輪システムなんて物がありましたっけ。

「そ、それって!？」

「私たちが勝てるわけじゃない!」

400点以上の得点を取ると特殊能力のついた腕輪がもらえるところだったものでしたね。

「じゃ、いきますね」

腕輪の能力は個々によって異なるそうですが。

「ちょっと待ってよ!？」

「律子!とにかく避けないと!」

さて、姫路さんの能力は？

キュボツ!

「きゃあああーっ！」

「り、律子！」

なるほど、『熱線』ですか。

『Fクラス 姫路瑞希 & 盾宮優斗 VS Bクラス 岩下律子
& 菊入真由美

数学 412点 & 614点 VS 189点 & 151点
』

さすがですね、では僕も。

「着地姿勢を考えて回避しないと、矢のいいですよ」

「え？へ？」

ヒュン！ドスッ！

「申し訳ありません。一応勝負、ですので」

僕の召喚獣が放った矢は、相手の召喚獣の眉間の中心に突き刺さっています。昨日戦いで理解したのですが、召喚獣も人間と同じで頭、喉、心臓をやられると死亡するようです。

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「なっ！そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希に弓使い、噂以上に危険な相手だ！」

相手側の士気が下がり始めましたね、圧倒的な力ほど心を折る武器

はありませんからね・・・というか僕の名称は弓使いで確定なんですか？

「み、皆さん、頑張ってくださいー」

「やつたるでえーっ!」

「姫路さんサイコーッ!」

おやおや、すごい人気ですね。士気がうなぎ登りですよ。

・・・こうなると僕の腕輪の能力も知りたくなりますね、では。

「腕輪発動!」

ヒュン! ブスッ!

「な、なんだ!？」

「矢が飛んで来たぞ?」

「なんで俺があ!」

ふむ、矢を虚空から呼び出す能力・・・いや、あの矢の軌道と発射位置は・・・なるほど、そういう能力ですか。しかし確証が――

「姫路さん、優斗、とりあえず下がって」

「あ、はい」

「・・・了解」

仕方ありません、次の戦闘時に確かめますかね。

「・・・うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「ですが確実に点数には響いてきますね・・・」

僕らは一度、教室に戻って来ています。なんでも、Bクラス代表の根本という人は卑怯の代名詞のような人物という事らしく、様子を seen に教室に戻って来ている。と、いうわけです。

まあ、予想は大当りし。僕らを迎えたのは穴だらけの卓袱台、へし折られたシャーペンや消しゴム等でした。

「勝つためとはいえ、ずいぶんと器の小さい人物ですね、その根本とかいう人は」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二がそう言うならいいけど」

・・・確かに修復のできる範囲内の被害ですが・・・相手側もそれくらいはわかるでしょう。となると目的は意識をそらす事や時間を使わせる事・・・目的は別にありそうですね。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのに気づかなかったの？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定？内容は？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

「つまり、体力の少ない姫路さんを万全の状態にするために休息の時間を作る・・・そういう見方でいいんですね？」

「そのとうりだ」

・・・しかし・・・相手もそれくらいは承知しているはず・・・相手側のメリットは明日には回復している文具の破壊工作のみ・・・ほかに目的があるのでしょうか？

「明久、優斗。とりあえずわしらもぜんぜんに戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

「あ、僕は文具のほうを手伝います、色々考えたいこともあるので」

「ん。じゃあ、雄二、優斗、あとよろしく」

「お気をつけて」

さて、僕らはゆっくり休んでいましょうか。変なこともおきないでしようしね。

数分後、誰かに散々殴られ、顔を地面に叩きつけられた明久君が運ばれてきました。

「いたい・・・何が・・・」

「演技がお上手ですね」

「ここはどこ？」

「あ、気が付きましたか？」

「やっと起きましたか、明久君」

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですから」

「運んできてくれた皆さんに感謝する事ですね」

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

「まったくです・・・まあ、やった人物は想像がつきますが。」

「ちょっといろいろあってね。それで試召戦争はどうなったの？」

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害も少なくないがな」

「ハプニングはあったけど、今のところ順調ってわけだね」

「まあな」

・・・しかしおそらく相手の作戦は残っている。動きがあるとしたら僕らが学校にいるうちに何かあるはずです。

「・・・・・・・・（トントン）」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

おや、諜報担当のムツツリーニ君ですね。Bクラスが動いたのではありませんか。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだと？」

「・・・・・・・・（コクリ）」

Cクラスが動く・・・目的がAクラスなんて事はないでしょう。つまり――

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

今の戦争で疲弊している相手を叩く。誰でも当たり前前に思い付く作戦ですね。

「雄二、どうするの？」

「んー、そつだなー」

「ここでとるべきは防御の為の協定を・・・協定?・・・まさか!

「Cクラスと協定でも結ぶー」

「ちょっと待ってください!」

「っと。どうしたんだ優斗?」

「下手に動かない方がいいでしょう。このCクラスの進軍情報こそ、Bクラスの作戦の可能性があります」

「なに!?!」

「ちよつ、それ本当?」

「ええ、おそらくですが」

「じゃが、なぜCクラスの進軍がBクラスに良い影響をあたえるのじゃ?」

「Cクラスが戦争終了後の僕らを狙って進軍するという情報が入たらどうしますか?」

「やはり。雄二のとつた作戦通り、協定を結ぶと思うのじゃが」

「Bクラスとの『試召戦争に関わる一切の行為禁止』があってもですか?」

「そうか!やつらの目的は協定のために来た俺を含む少数部隊!」

「ええ。しかもCクラスと協定を結びに来た“Bクラスとの協定破り”を倒すという大義名分まで持ってるね」

「くそっ、めんどくさい策を使いやがる」

「あのっ、ひとついいですか？」

「姫路さん？何ですか？」

「その作戦って、BクラスとCクラスが協力しないと成立しませんよね？」

「ええ、彼らの目的がそれならば、何らかのつながりがあると考えるべきでしょう」

「じゃあ、協力していない可能性も・・・」

「ええ、しかし、協力の有無にかかわらず。Bクラスに有利な状況を作り出してしまおうし、協定は結ばないほうがいいかと」

「確かにな。ムツツリーニ、CクラスとBクラスのつながりを調べてくれ」

「・・・・・・了解」

「・・・しかし、同盟が結べない以上、Cクラスが漁夫の利を狙ってくるのは当然・・・それをどうするかを考えないといけませんしね・・・」

「心配するな。向こうがそう来るなら、こっちにだって考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝実行する。目には目を、だ」

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、午前八時三十分です。Bクラスとの戦闘は九時に行う予定なので、おそらくCクラスへの作戦でしょう。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Cクラスへの作戦ではないでしょうか？」

「あ、なるほど。それで何をするの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

とって取り出したのは女子の制服・・・って。

「雄二君・・・そんな趣味が・・・」

「ちょ、おいまで。これは作戦だからな!？」

「あ、いえ、いいんですよ。趣味は人それぞれですし・・・」

「盛大に勘違いしているじゃねえか！」

「まあまで、このままでは話が進まんぞい」

「それもそうですね。面白かったのでまあ良しとしましょう」

「てめえ・・・いつかぶっ飛ばす・・・！」

「まあまあ、それで？ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

木下優子・・・自己紹介のときに上げられていた名前の一つだったような気がします・・・わかることといえば、秀吉君にそっくりである可能性、Aクラスであることですかね・・・しかし、演技がうまくなくてはばれてしまうのでは・・・そういえば演劇部に所属していると言っていましたね、うまいのでしょうか？

「んじゃCクラスに行くぞ」

「ん、ああ、はい」

おや、また考えすぎていたようですね・・・しかし、顔が赤い人が多いような、どうしたのでしょうか？

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」

「気が進まんのう・・・」

たしかに、お姉さんの評判を著しく下げてしまいますし・・・

「そこを何とか頼む」

「むう・・・仕方ないのう・・・」

「悪いな。とにかく相手を挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

「はあ・・・あまり期待はせんでくれよ・・・」

本当に気が重そうですね、演技に影響しなければ良いのですが・・・

ガラガラガラ

秀吉君が教室に入りますね。さて、いったいどのようなことを喋るつもりなのでしょうか・・・

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

・・・（絶句）

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね・・・」

「と、というか、開口一番に豚どもとは・・・」

「いったいどんな性格なのでしょう・・・秀吉君のお姉さん・・・」

「な、何よアンタ!」

この声は・・・おそらくCクラスの代表でしょうね。

「話しかけないで!豚臭いわ!」

いや、自分から来たのでしょうか?

「アンタ、Aクラスの木下ね?ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ!何の用よ!」

うまく引つ掛かってくれていますね。しかし声が完璧に変わっていますね。すごい才能なのは・・・

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの!貴方達なんて豚小屋で充分だわ!」

「なっ!いうことに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!?!」

貴方のなかではFクラス=豚小屋という方程式が成り立っているのですか?

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

気持ち良い位の罵倒ですね。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから!』

そう言ってこちらに来る秀吉君。

「これで良かったかのう?」

ストレスを発散したような秀吉君。まああんな罵倒を気持ちよく言えたのですし、無理ありません。

「ああ。素晴らしい仕事だった」

そのようです。現に『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めるわよ!』という声が聞こえてきます。作戦は大成成功ですね。

・・・ところで・・・

「秀吉君?」

「ん?何じゃ?優斗?」

「秀吉君のお姉さんはあんな性格なのですか?」

「うむ、学校では猫を被っているがの」

という事は優等生のキャラクターを演じている。ということでしょうか・・・では。

「先ほどの会話、バレたら不味いのでは？」

「うむ、じゃがバレなければ良いのじゃ」

「・・・彼らはAクラスに向かうのですよ？」

「・・・あ」

「・・・気がついたようですね・・・」

「戦争には犠牲がつきものである（今回も明久君）」（前書き）

バカテスト 〔第五問〕

科学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希・盾宮優斗の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめてはいませんか。

吉井明久の答え

『B E I N I Z I E I N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に来るように。

「戦争には犠牲がつきものである（今回も明久君）」

「なるべく固まって隙を消すようにしてください！後、戦線を拡大させないように！」

現在、9時をすぎてBクラス戦が再開されてから少したたっくらいです。

現在の指令は『敵を教室内に閉じ込めろ』というもの。これはこの戦争で勝つための作戦の一部です・・・しかしこんな作戦をよく思いつきましたね、感服します。

そして僕は左側出入口の司令官として先頭区域より少し後ろで指示を出しています・・・戦闘に参加はしたいのですが、あいにく混戦状態。僕の召喚獣は使い物にならないので、司令官として活躍しているわけです。

「左側出入口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

む・・・押されてきましたね、しかし古典は苦手教科・・・僕が援護できればいいのですが・・・

「姫路さん！援護をお願いします！」

姫路さんは今回の作戦での鍵を握る重要人物なので、頼りすぎるわけにはいけないのですが・・・しかし、変ですね。姫路さんは先ほどからどうしたのでしょうか？召喚獣もだしていませんし・・・何か

あつたのでしょうか？

「だあぁっ！」

つて、明久君？どうして君が来るのですか？

人ごみを掻き分け、立会人の古典の先生に何かを呟く。そのとたん、頭を押さえてキョロキョロと周りを見る先生・・・カッラですね。

「少々席を外します！」

どこかへ行く先生・・・まあ、あの反応でカッラだということはこのにいる全員に知られてしまいましたかね。

「くそっ、押さえてきたぞ！」

「援護はまだ来ないのか！？」

おや、こちらはまだピンチのようですね。何か使えるものは・・・
そういえば、先ほどムツツリー二君から情報をもらってましたね・・・
・あれを使えば。

「えゝ皆さん！伝達情報です！」

「なんだ！新しい作戦か！？」

「Bクラスの代表がCクラスの代表と付き合っているという情報が入ってきました」

これは昨日、雄二君がムツツリー二君に頼んでいたBクラスとCク

ラスのつながりです。もつとも、今は関係ないように思えますが、いまこの情報を流す意味は……

「諸君、Bクラスの根本恭二が我らが血の盟約に反したようだ」

『拷問！抹殺！』

「よろしい、ならば突撃だ！」

『サーイエッサー！』

^{FFFG団}彼らを動かす為です。

『な、なんだこいつら！？』

『いつの間に覆面を！？』

『来るな！こつちに来るな！』

効果観面^{てきめん}ですね。

・・・おや？明久君がいませんね、どうしたのでしょうか？

「優斗」

「あれ？雄二君？来るのが早くありませんか？」

「ちょっと予定がくるってな」

「予定？たしか次は・・・姫路さんによる近衛部隊の陽動ですね？」

「そうだ、それを明久がやる」

「・・・できるのですか？高得点の姫路さんならともかく、明久君では・・・」

「まあ普通はそう思うが・・・ま、明久にも秀でている部分があるということだ」

「ふむ・・・」

明久君の秀でているところを利用した作戦・・・だめです、わかりません。

「一体なんなんですか？その作戦は？」

「安心しな、すぐにわかる」

ふむ・・・まあ、わかるまで待ちますか。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

おや・・・この声は・・・

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

Bクラス代表・・・彼が根本ですか。

・・・なんでしょう？Bクラスの壁から何かを叩くような音が聞こえるのですが・・・

「はあ？ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだし、弓使いは味方が邪魔で参戦できてないじゃねえか！」

「ああ、違いますよBクラスの代表さん。僕が出ないのは、単にあなた方に射る矢がもつたないからですよ」

「けっ！口だけは達者だな。弓使いさんよお」

「おや？知らないのですか？僕の名前は盾宮優斗ですよ？弓使いではありません。もしかしてそんな事も調べていないんですか？」

「ちっ、うっとうしい奴だ」

「・・・壁の音が酷くなってきましたね。ヒビが入るような音も聞こえますし・・・待てよ、そういえば明久君・・・陽動・・・観察処分者・・・まさか。」

「・・・さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「あり得ますね、幸薄そうな顔をしていますし」

「けっ。言ってる。どうせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「・・・態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

いえ、ただ純粹に貴方から部隊を引き離すため、ですよ。

「あとは任せたぞ、明久」

おそらく、明久君がやることは――

「だああーしゃあーっ！」

Bクラスの壁の破壊！

ドゴォッ

豪快な音をたて、Bクラスの壁が砕けた。

さすが召喚獣、コンクリートくらいは破壊しますか。

「くたばれ、根本恭二いー！」

明久君の部隊が根本に勝負を挑む。

「遠藤先生！Fクラス島田が――」

「Bクラス山本が受けます！試獣^{サモン}召喚！」

「くっ！近衛部隊か！」

教室内の近衛部隊が行く手をふさぐ。

・・・さて、僕も準備しますか。

ここで、先ほど聞いた教科の説明をしましょう。

各教科には担当教師がいて、その先生によってテスト結果にも特徴が現れます。

数学の木内先生は採点が早い。世界史の田中先生は点数のつけ方が甘い。英語の遠藤先生は寛容で、多少の事は見逃してくれます。

何故こんな話をするかというと、今回の作戦にその先生の特徴が組み込まれているからです。

科目は保健体育、特性は体育教師であるが為の――

ダン、ダンッ！

ロープを使用し、窓から入ってこられるほどの行動力です。

まあ、窓が開いていなければ入れなかったのですが、出入り口に人の山。空調が止められ停止したエアコン。そのせいで教室内にはかなりの熱気がこもります。よって窓を開けざるを得ない。という訳です

「・・・Fクラス、土屋康太」

「ムッツリーニィーッ！」

「き、キサマ・・・くっ！」

出入り口に向かおうとする根本、しかし。

「残念ですが行き止まりですよ？代表さん」

「ゆ、弓使い！？」

「注意が削がれていれば、召喚獣で人を飛び越えるくらい簡単ですよ・・・さて」

「・・・試獣^{サモン}召喚」

「王手、です」

『Fクラス 土屋康太 & 盾宮優斗 VS Bクラス 根本恭二
保健体育 441点 & 168点 VS 203点』

こっちに向かってきた根本の召喚獣の足を射って、態勢を崩したところをムツリー二君の召喚獣が止めをさしました。

さて、Bクラス戦終結ですね。

「たぶんトラウマになるでしょう」

「まったく、こうなることくらいわかっていたでしょうに」

「うう・・・痛いよう、痛いよう・・・」

武器あり＋一部しかフィードバックしないとはいえ、コンクリートの壁を破壊したんです。痛くて当然ですね。

「痛み止めをあらかじめ飲んでおくくらいの予防策はとっておいてもいいでしょうに・・・まあ、明久君ですし、仕方ありませんね」

「・・・遠回しに馬鹿って言ってるじゃない？」

学校の壁を破壊した事により、明久君は退学や留年になってもおかしくなかったのですが、初犯ということで見逃してもらったそうです。「ま、それが明久の強みだからな」

馬鹿が強み・・・まあ・・・明久君らしいといえはらしいですが。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「・・・・・・・・・・」

ゆかに座り込み、おとなしくなっている根本君。さすがにかわいそうになっってきましたかね。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプ

レゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

やっぱりそう来ますか。周りはざわめいていますが。

「落ち着け、皆。前にもいったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうと思う」

「・・・条件はなんだ」

受けるしかないですよ。もし受けなければ廃屋と卓袱台が待っているんですから。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き放題やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

「凄い言い様ですね。さすがにフォーローが・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・きませんね。味方にも嫌われているんですか。」

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」
お昼に言っていたあの取引ですね。

「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言してこい。そうすれば設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・それだけでいいのか？」

はい、それだけで――

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

はい？何で女子の制服を？まさか雄二君、本当にそんな趣味を・・・

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなことを・・・」

当然嫌ですよね。Bクラスの皆さんも何か言ってます――

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るならやらない手はないな！』

味方〃〇

むしろ清々^{すがすが}しいほどに哀れですね。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

本当に人望の無い人ですね。一瞬で見限られました。

明久君が着替えさせにきましたが・・・今のうちに。

「・・・雄二君？」

「ん、優斗か。どうした？」

「なぜ女子の制服を？本来は宣戦布告だけのはずでしたのに・・・」

「ああ。それなら明久が根本の制服が欲しいと言ってきてな。まったく、何がしたいやら」

なるほど。ということは。

「雄二君に続き、明久君までそんな道に・・・残念です」

「ちょっとまって！朝のことまだ引きずってんのか！？」

「いえ、大丈夫ですよ。たとえ友人二人が変態でも僕は・・・」

「どこが大丈夫だ！明久はともかく、俺は変態じゃねえ！」

・・・ん、明久君が制服を持って教室を出ましたね。ちょっと様子

を見ますか。

「あ、ちよつと席を外しますね。それでは」

「あ、ちよつとまで！」

雄二君は・・・まだ楽しめそうですし、放置しますか。

・・・誤解したまま行くんじゃないー！・・・と声が聞こえてきましたが、無視しましょう。

さて明久君は・・・制服の・・・ポケットから・・・封筒？あれは昨日の・・・なるほど。あれで姫路さんを脅していたと。だから彼女は行動できなかつたんですか。それに明久君の壁破壊の暴挙もうなずけます。

・・・根本でしたっけ？あの人は・・・少しお仕置きが必要みたいですわね・・・

・・・軽く社会的に抹殺しますかね。

プルルル・・・プルルル・・・ガチャ

「あ、もしもし。氷^{ひょう}さん？」

「あら？盾宮の僕じゃない。蓮菜^{れんな}元気にしてる？」

「元気ですよ？元気過ぎて困り者ですが・・・」

「あら、それは良かったわ。で？今日は？」

「ええ、実は撮ってほしい人物がいるのですが・・・」

あ、ここで説明しておきます。氷さんとは。母の学友で、カメラマンをやっているのですが・・・女装専門のオカマカメラマンなんですよね・・・（性別は です）まあ根本君の女装姿を耐えられる人はこの人しかいないでしょうし。

あ、あと蓮菜とは母の名前です。

「・・・ええ、ではよろしくお願いします」

ピッ

・・・軽く地獄を見てきてくださいね。いろいろと。

一夜

「なかなか面白い被写体だったわ。また撮らせてね」

「・・・機会があつたら呼びますよ」

かわいそうに、氷さんに好かれるなんて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7671m/>

バカと弓矢と召喚獣

2010年10月8日13時08分発行